

カイニヨを活用したツアーによる景観保全活動についての一考察

The Role of Rural Cultural Tourism in Landscape Conservation : A Case of Dispersed Settlement in Tonami Plain

金岡 奈穂子* 森重 昌之* 敷田 麻実**

KANAOKA Nahoko, MORISHIGE Masayuki, SHIKIDA Asami

富山県砺波市は全国一の散居景観を誇る地域として知られているが、生活様式の変化による屋敷林(カイニヨ)の減少や都市化の進行などにより、その景観が失われつつある。そこで本研究では、カイニヨを活用した体験ツアーが、地域住民と観光客の交流を通じて、散居景観やそれらを培ってきた歴史・文化の価値を再認識する機会を創出できることを示した。そして、散居景観の保全のためには、散居村に関する知識の蓄積や伝統・文化の継承のみならず、現代生活に適応したカイニヨの活用方策などの検討が必要であることを指摘した。

キーワード：景観保全、体験ツアー、散居景観、屋敷林(カイニヨ)

1. はじめに

農業従事者の高齢化や後継者不足が進行している地域では、農地が耕作放棄地として荒れつつあり、里山の農村景観の維持が困難な状況にある。

富山県砺波平野は、伝統的な散居景観が広がる地域として知られている。全国では、北海道の十勝平野、静岡県の大井川扇状地、島根県の斐川平野などにも散居景観が見られるが、砺波平野に広がる散居村地帯はその形態が典型的であり、面積が約 220km²、散居民家約 7,000 戸を数え、全国一の規模を誇っている。しかし、砺波平野においても生活様式の変化、散居景観を構成する屋敷林(カイニヨ)の維持にかかる負担の増加などにより、その景観が失われつつある。

近年、地域住民が地域資源を知る機会や地域外住民に地域を評価してもらう機会をつくり出す試みが各地で見られるが、このような取り組みによって景観保全への関心を高めることができると考えられる。そこで本研究では、景観保全の1つの手段として、カイニヨを活用した体験ツアーを実施し、その効果や有効性を明らかにした。また、体験ツアーを継続することを通じて、散居景観の構成要素である住民を中心とした生活文化や歴史、伝統などを継承し、それによっても景観が保全される可能性を示した。

2. カイニヨの役割と保全に向けた動き

(1) 富山県砺波市の概要

砺波平野の中心である富山県砺波市は、富山県の西南に位置しており、庄川からなる扇状地の扇央部に位置する。平成 12 年の人口は 40,744 人、世帯数は 11,421 世帯である。平成 2 年と比較すると、人口で約 10%、世帯数で約 20%増加しているが、核家族化が進んでいる。また、昼間人口は約 5%減少しており、隣接の高岡市を核とするベッドタウン化が進行していることがわかる。



図-1 砺波平野の位置

(2) カイニヨの役割

砺波平野に広がる散居村の起源は、洪水を避けるために高い場所に家を建て、その周囲を開いて耕作するようになったことからできあがってきたといわれている¹⁾。このような散居形態は、開拓が急速に進む中世末から近世初頭にかけてできあがった。そして、散居を構成する要素である伝統的家屋を取り巻く屋敷林を、砺波地方では「カイニヨ」と呼んでいる。その起源につ

* 株式会社計画情報研究所 ** 金沢工業大学環境システム工学科

いては定かではなく、開拓時に原生林の一部を残したもののとも、防風林や日よけとして植えたとも言われている²⁾。カイニヨはスギ、ケヤキなどを中心とした高木層、ツバキ・アオキなどの中低木層の木々で構成されている。防風、日よけという役割のほか、かつてはスンバ(スギの落ち葉や小枝)を燃料とし、その材を建築用材としても利用してきた。また栗や柿、梅を植え、花を鑑賞し、果実は食料や副収入となった。女の子が生まれると桐の木を植え、嫁入りに備えた。「高(土地)を売ってもカイニヨは売るな」とも言われ、先祖代々大切に守り育てられてきた³⁾。

しかし、昭和30年代中頃から40年代頃にかけて、燃料が石油やガスに代わり、改築した家の窓枠にはアルミサッシが使われるなどといった生活様式の変化によって、カイニヨの役割に変化が見られるようになった。加えて、落ち葉の処理に労力と維持費がかかることや核家族化、都市化、ベッドタウン化などの影響も受け、カイニヨの維持が難しくなりつつある。

(3) カイニヨの保全に向けた動き

平成11年に富山県が行った一般住民(N=1,308)を対象とした質問票調査では、散居景観を後世に残す必要性について、64.7%が「必要である」と答えている。その理由として、「砺波平野の特徴的な希少性のある景観だから」が66.1%、「自然環境として価値があるから」が50.2%、「人間と自然が共存する時代の手本となる生活様式だから」が39.0%あげられた(複数回答)。

これまでの燃料や建築用材としての役割を終えたカイニヨではあるが、地域の個性、自然環境としての価値、循環型社会の手本など、新しい価値や意味づけが望まれていることがわかる。また、他の地域から砺波平野を訪れる人が増えることについては、46.6%が「増えた方がよい」と考えている。その影響としては、「地域に活気を与える」と考えている人が49.8%、「散居村や屋敷林への理解が深まる」と考えている人が38.1%であった(複数回答)。

一方、カイニヨに囲まれた伝統的家屋に住む人(N=1,133)を対象とした質問票調査(平成12年実施)では、現在の砺波平野の景観に対する考え方は、「砺波平野の景観は住民だけでなく地域全体のもの」が36.1%、「散居の景観は守っていく価値のあるもの」が23.1%、「砺波平野の美しい散居景観に誇りを感じる」が23.1%で

あった。これらのことから、散居村の景観を地域の共有の財産として捉えていることがわかる。

このような住民意識を背景に、富山県と砺波平野に位置する市町村では、平成15年から「散居景観保全事業」により、地域住民による散居景観の保全やカイニヨの維持管理について協定が結ばれた地区に対して支援を行っている。しかし、費用負担は枝打ちなどにかかるものだけであり、木を植えるためなどの補助ではないという点、また補助対象を景観としているが、背景にある人材の育成、生活文化や歴史、伝統などの維持・活用と絡めた内容になっていないという問題がある。

また民間レベルでは、平成9年から「砺波カイニヨ倶楽部」が発足し、カイニヨのある家の住まい方見学会、スンバ掃除、勉強会の開催、知事との意見交換会、会報の発行などの活動を継続的に行っている。「砺波カイニヨ倶楽部」は会員がカイニヨの価値を再認識し、楽しむ場になっている。しかし、会員全員がボランティアであり、会員以外がカイニヨへの理解を深めるための情報発信や、景観保全のための積極的な活動の実施が難しいという問題がある。

3. 景観保全に向けた体験ツアーの実施

散居村やカイニヨを取り巻く環境が変化する中で、カイニヨの保全に関わる有志によって、体験ツアーを実施することとした。その目的として、まずカイニヨのない家の住民に、散居景観が住民共有の財産であるという認識を深める契機をつくり出すことがあげられる。第2に、カイニヨを持つ住民に対し、地域外住民から評価されることにより、そこに住まうことに誇りを感じる契機となる点がある。さらに、散居景観やカイニヨに対する地域内外の理解を深め、保全の意識を高め、保全に関する知恵を得る機会をつくり出すという目的もある。

体験ツアーは、平成14年5月4~5日、平成15年5月3~4日の連休に1泊2日で行った。いずれも、県外から約10名、県内から約20名の参加者があり(表-1)、20歳代の参加者が半分以上を占めた。参加者は、応募チラシを作成して口コミや砺波市のホームページへの掲載などにより募集した。なお、平成14年と平成15年のどちらも参加したのは、1名であった。

また体験プログラムは、表-2に示すように、砺波の

歴史、文化、産業を感じられるような内容にするともに、民泊により散居景観を形成するカイニョのある暮らしを体験できる内容とした。

表-1 体験ツアー参加者の居住地

参加者の居住地	東京都	大阪府	京都府	新潟県	長野県	山梨県	石川県	山口県	福岡県	富山県内	合計
平成14年	4	2	1	2	1	2	-	1	-	17	30
平成15年	3	-	2	-	2	-	1	-	2	17	27

参加者の居住地	平成14年	平成15年
東京都	4	3
大阪府	2	-
京都府	1	2
新潟県	2	-
長野県	1	2
山梨県	2	-
石川県	-	1
山口県	1	-
福岡県	-	2
富山県内	17	17
合計	30	27

表-2 体験ツアープログラム(平成14年)

日	内容
1 目	砺波駅集合 自己紹介
	お昼を食べながら散居村の眺めを堪能(閑乗寺) ・カイニョレクチャー
	合鴨農法確立者、荒田氏のお宅訪問 ・荒田氏のスライドをまじえてのレクチャー ・無添加手づくりお菓子を堪能
	民泊先へでスノーリフト ・カイニョレクチャー
	越中庄川荘でお風呂 「食の伝承人」田嶋氏の郷土料理で宴会
2 目	民泊先の家周辺散歩
	荒田氏のお米と味噌で朝ご飯
	チューリップ公園散策
	名越家の鏝絵(双龍)見学
	千光寺の鏝絵見学、鏝絵レクチャー 梅原邦荘で昼食

特に、参加者に散居景観の美しさを見せて伝えるだけでなく、その維持の背景にある落ち葉掃除を体験メニューとして盛り込み、維持の負担を体験するプログラムを設定した。また、宴会に地域住民を招いたり、一度砺波平野を訪れただけでは会えないような人から話を聞いたり、普段見られないものを見せたりする機会を設けた。さらに、散居景観を共有の財産と認識し

てもらうために、なるべく多くの地域住民に事務局として協力・参加していただいた。地域住民の参加募集にあたっては、普段から景観保全やまちづくりなどに興味関心を持ち、景観保全のためのアイデアを持っている人を中心に声をかけた。

そして、体験ツアーの評価や効果などを把握するために、体験ツアー後に参加者にツアーの満足度を把握する質問票調査を行った。また、散居景観の保全に向けたアイデアも募集した。さらに、体験ツアーの数週間後に、電話での聞き取りによる追跡調査を行った。

4. 考察

(1) 体験ツアーの成果

体験ツアーでは散居景観だけでなく、それを形成する地域資源を地域外住民に紹介すると同時に、地域住民に地域資源の再評価や景観保全への意識の高揚を促すことができた。

また、これまで、このような体験ツアーに関わる立場として、参加者と受け入れ側という2者が考えられた。しかし、参加者の中でも特に地域内からの参加者は、極めて受け入れ側に近い立場でありながらよそ者(地域外からの参加者)の視点を持って参加していたようであり、参加者、受け入れ側、地域内の参加者という3者以上の立場があることがわかった。

地域外からの参加者は、これまで知らなかった体験ツアー後の質問票調査の結果から、「美しい散居景観やカイニョを目にしたことに感動した」と答えた参加者が最も多かった。また、「カイニョ倶楽部の代表幹事による農業やカイニョに関する話がおもしろく、地域住民と交流できた点がよかった」、「『食の伝承人』として富山県が指定している人物による郷土料理がよかった」という評価が多かった。

さらに地域内の参加者からは、自分たちが普段住んでいながら知らなかった地域資源や人物を地域外の人に評価されることや、ツアーという非日常体験を通じ、自分たちがよそ者になることによって再認識、再評価する機会となり、今後も学習や交流を続けていきたいという意見が聞かれた。

一方、受け入れ側は地域資源であるカイニョや文化、人物を紹介できたこと、地域外住民と交流ができたこと、世代間交流ができたこと、地域資源や人物を知る

ための学習機会ができたことを成果として捉えていた。

また、参加者から景観保全のための提案が多くあり、地域外の人からの知恵を成果として得ることができた。中でも地域外の人による「カイニョサポーター」の組織化や、総合学習と体験ツアー、景観保全活動の連携の推進といったアイデアは今後検討すべき項目である。

参加者への電話による追跡調査から、東京や京都からの参加者が友人にカイニョを宣伝したという報告があり、参加者のカイニョに対する関心が高まったことも確認できた。

(2) 体験ツアーの課題

参加者の質問票調査によると、ツアーの実施による成果があげられるが、継続に向けての課題もいくつか見られた。カイニョや農業などに関する体験型プログラム、多様なニーズに対応できる時間的ゆとりとオプションツアー、個人旅行や体験ツアー独自の特別な体験プログラムの必要性があげられた。今後は多様でレベルの高い参加者のニーズを満たすためのツアーの改善が必要である。

このようなツアーの継続のためには、以下の3つの課題を克服する必要がある。第1に、多様なニーズに対応する地域資源のデータベース化を進める必要がある。そのためには、生涯学習などを通じ地域住民自身が地域を学習し、地域資源や人材を発掘し、その活用方法を検討する機会をつくる必要がある。その過程で、いろいろな人が参加し、地域資源を共有し、それらを繋げることによって、より質の高い体験メニューを考案する必要がある。

第2に、多様な体験メニューと観光客のニーズをうまくコーディネートする機能が必要である。これにより、ツアーの日程や人数、年代などによって違うニーズを見極め、観光客のニーズを満たしながら、地域の魅力を発信できると考えられる。

第3は、今回の体験ツアーの参加者から、農業やカイニョを紹介した人の話がおもしろかったという意見があったことからわかるように、ツアーの参加者の満足度は、受け入れ側の資質によるところが大きい。地域への愛着が強く、知識と経験が豊富で話し上手な人材の育成が必要である。

5. おわりに

本研究では、散居景観の保全に向けた1つの手段として、カイニョを活用した体験ツアーを実施した。その結果、参加者から散居景観やカイニョに対する関心を高められたという評価、受け入れ側から地域資源を再評価・再認識し、地域外住民からの評価によって自分たちの住まい方に誇りを持つことができたという成果が得られた。また、景観保全について参加者という外からの知恵を得ることができた。また、これまで参加者と受け入れ側という2者のみで考えがちだったツアー関係者の立場であるが、参加者の中でも地域内参加者は、受け入れ側に近い立場であることがわかった。

ところで、砺波平野の散居景観やカイニョは、それらを取り巻く砺波の農業、歴史、生活文化、誇り、人材(人財)などによって保全されてきた。その意味で、散居村やカイニョはこれらを具現化した1つのシンボルと捉えることができる。体験ツアーを継続することによって、景観を支えてきた要素を発掘し、それらを活用する機会を増やすとともに、新しい意味や価値を加えることができると考えられる。

しかし、このような体験ツアーを継続することだけで、散居景観を維持することは難しい。また、昔と同じようなやり方で散居景観を保全するだけでは、現代のライフスタイルに合わなくなったカイニョを保全できない。そこで、落ち葉(スンバ)の活用を目的としたペレット化やスンバペレットストーブの技術的な研究、現代の家族形態にもあった伝統的家屋の改築方法の研究などが必要である。これまでの良さを伝えつつ、現代のライフスタイルに合った資源循環型のカイニョでの生活と新しい伝統的家屋の住まい方のモデルを提示し、誰もが、特に若い世代が住んでみたいと思うようなライフスタイルを提案することが必要である。

今後は、体験ツアーや生涯学習などを通じた、地域資源の再評価、資源の活用方法の検討という過去を評価する作業と同時に、現代と未来のライフスタイルにあったカイニョの活用方法や伝統的家屋の改築による住まい方の研究が景観保全のためには必要である。過去の遺産を評価し、現代にあった形で継承することと未来への新しいライフスタイルの提案を行うという両輪がそろって初めて景観保全が行われるのではないかと

最後に、体験ツアーには、地域内住民が参加すると、彼らが普段見ている地域をよそ者のような視点で見る

という効果を生む可能性があるのではないか。その理由として考えられるのは、ツアーにより非日常空間が演出されているため、普段の生活、景観などが非日常のものとして見えるという要素、非日常空間に1泊2日という物理的に長い時間身をおき、多くの体験や知識をインプットし、宿に泊まって、知識を再編するという作業が生じるという要素である。これらの体験を通じて、地域住民であってもこれまでとは違った側面から地域や景観保全に関心が高まり、これまでとは違

った保全活動につながる可能性があるのではないか。

【参考文献】

- 1) 田園空間整備事業となみ野地区推進協議会(2003)：砺波平野の屋敷林を学ぶ, p.4
- 2) 田園空間整備事業となみ野地区推進協議会(2003)：屋敷林維持管理の手引き, p.1
- 3) <http://www.city.tonami.toyama.jp/gaiyo/sankyo/sankyo.html> (2003.11.03)